

2、「尖閣アホウドリ」切手 発行謎 追う

No.3、琉球郵政庁 首脳幹部 極秘に計画？

切手審議会メンバー アホウドリ？ 聞いたことない 知らない

この「尖閣アホウドリ」切手発行の事実は今だに公にされてない、摩訶不思議だった。いったい、これは誰が発案したのか、琉球郵政庁か、上層の通産局の指示か、はたまた、琉球政府首脳の意向だったのか？ どんな経緯で遂行されたのかも分からない。

アホウドリ剥製を持ち込んだ郵政庁長渡嘉敷真球も、この世にいない。

当時の琉球郵政庁首脳幹部は、誰も残っていない。

琉球切手が展示してある郵政弘済会沖縄支部を訪ねて聞いてみた。

渡久山長靖担当は、こんな事実があったとは、自分も知らないと言った。

当時の切手審議会メンバーに聞いてみたら分かるかも知れない。

審議会で審議し、承諾されないと、原画決定も、切手発行もできないから、とのことだった。

教えてくれた審議会メンバー中に、かのマエシロイサム(元琉球郵趣会真栄城勇会長)がいた。

50年ぶりに聞く懐かしい名前だった。元切手少年にとって、マエシロは琉球切手収集界に君臨するど偉い人だった。琉球切手のことなら何でも知っている神様だった。

だが、一兵卒の少年らには、大元帥の如きであり、口さえ聞いたことない、畏れ多き存在だ。

勇気を揮って、恐る恐る電話を入れた。

「尖閣に関する切手案件を審議したことがありますか？」

「??…… 何のことかね？」

「あのう、海洋シリーズ第三集の『海鳥と海と島』のことで、アホウドリとか、尖閣諸島とか」

「さっぱり、意味がわからん、どういうことを、君は、聞きたいのか？」

予期せぬ反応に慌ててしまい、「海鳥がアホウドリに似て、島は尖閣に似ていますから」と繰り返したら、穏やかな口調は、「審議会に提案されたことも、審議したこともない !!」と怒号に変わった。

一喝されて、「そうですか、すみませんでした。」と、大慌てで電話を切ってしまった。

琉球切手の神様が「知らない」と言ったのには、とても驚いた。信じられなかった。

実際は知っているはずだ。嘘も方便だとして、神様は隠しているとしか思えなかった。

納得いかなかった。他の人を探し、電話することにした。

誰にしたか、はっきり覚えてない。

当時のメモを見ると、神様の傍らに大嶺昇(元琉球郵趣会会長)の名が記してある。

今度も、やはり同じような返事が返ってきた。

「君は、何のことを言っているか、あれは尖閣を描いたものでない」と又も言葉を荒げている。

自分の口から、「郵政庁がアホウドリ剥製を持ってきて、原画製作者は描いています」と言える立場でない。ひたすら、「海鳥はアホウドリに似て、島は尖閣に似ていますから」と繰り返した。

とうとう、堪忍袋の緒が切れたのか、「なぜ君は、あれは尖閣ではないか、と言いがかりをつけるのか」と怒鳴り、ガチャンと電話を切ってしまった。

「君は、尖閣、センカクと言うが、右翼の活動家なのか」と言わんばかりの剣幕だった。

二人とも、何であんなに怒ってしまったのか、考えざるを得なかった。

元審議会の大先生方のあの怒り方を見ると、ほんとに知らないのではないかと思った。

切手審議会で、切手原画は、厳しい審査に付される。もしも原画が「尖閣の島と海とアホウドリ」を描いていると分かれば、審議は紛糾し、アウトになる。それでは万事が休すである。

郵政庁は、どうすれば、審査の目をうまく潜り抜けれるかと考え、単に沖縄の『海と海鳥と島』を描いているとして、素知らぬ顔で、審査に付したのではないか。

また、審議会の先生方も、何の疑いも持たず、問題ないとして、原画審査をパスさせたに違いない。だとしたら、これは琉球郵政庁の一部の人しか知らないことだろうか？

アホウドリ調査された高良鉄夫先生は、このことを知っておられるか、気になった。

冒頭紹介した「インクで描いた最初の琉球切手」は、「沖縄切手のふるさと」の本からの引用である。

先生も、この本に「沖縄の自然に生きる天然記念物たち」を寄稿されていた。

先生が琉球切手で取り上げたのは、ジュゴン、ケラマジカ、ノグチゲラ、セマルハコガメ、ヨナグニサン、コノハチョウの6種だけだった。アホウドリは国際天然記念物だが、これを描いた海洋シリーズ第3集は、この中にはなかった。

直に、先生に聞いてみた。

「尖閣アホウドリ」切手をじっと見入って、にっこりとつぶやかれた。

「これはアホウドリだね。あの時、気付かなかったけど、確かに、アホウドリだ(笑)。

これ描いたのは安次富さん？ほんとに上手に描いている。ここ(岩棚)で繁殖して、尖閣諸島全体で、今は相当殖えている。長谷川博さん(東邦大学)の調査では、もうすでに、200羽余りに殖えている。国や県は、尖閣諸島をアホウドリの繁殖地として、天然記念物(特別保護区域)に早く指定してもらいたい」と仰った。



上:南小島岩山断崖岩棚で繁殖しているアホウドリ。
下:南小島岩山斜面のアホウドリ。北小島にも生息地を広げ、年々その数は殖やしつつある。(水島邦夫 2002)

先生も、第3集が「尖閣アホウドリ」を描いた切手であると知っておられない。
また知らされてない。やはり、琉球郵政庁一部の人が知らない事実と分かった。

琉球切手発行に 米国民政府の厚い壁 発売寸前 停止も

琉球郵政庁は、海洋シリーズで「尖閣アホウドリ」切手発行を秘密裡に計画したのは明白だ。
だとしたら、首脳幹部という限られた人間で行われたことは、当然予想された。
発行に際して大きな壁が立ちはだかつており、慎重に進めてきたに違いない。

琉球郵政庁は、切手発行の権能を有していたが、それには、琉球列島米国民政府(USCAR)、
本土政府(大蔵省印刷局)、琉球政府(切手審議会)などの厳しい審査が待ち受けていた。

とりわけ、米国民政府の壁は厚かった。

切手発行の初期段階から、「琉球郵便」表記に対して、注文を付けていた。
第一次通常切手(発行1948.7.1)(前掲1P)の表記は、2年後発行した第二
次通常切手(50.1.21)(同上5p)から「RYKYUS」に替わっている。

なぜか、これは13カ月しか続かなかった。

琉球三大記念切手(同3p)の蔡温植林記念(51.2.19)以降、もとの「琉
球郵便」に戻っている。ところがその10カ月後に発行した琉球政府創
立記念(52.4.1)原画には、なぜか「RYKYUS」としている。

米国民政府の方針急変?に備えたのかと、つつい考えてしまう。

幸い、「琉球郵便」表記は、その後は長く続き、安泰だった。

1958年9月16日沖縄の通貨は、軍票B円から米ドルに切
り替わり、ドル表示暫定数字切手が発行された。価格は¢(セ
ント)、\$(ドル)になっても、表記は「琉球郵便」のままだった。

1960年11月1日「民族舞踊切手」6種が発行された。

無論「琉球郵便」表記である。ところが61年9月1日同6種
に加え、「民族舞踊切手」12種が発行された。

これら全て「琉球郵便 RYKYUS」の併記に替わった。

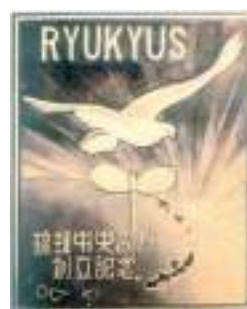
琉球米国民政府のこの指示は、万国郵便連合の申し合わせ
に則ったものか。この併記は、琉球切手最後の「Final Issue」(同
72.5.14)まで、琉球郵便が終息するまで続いた。

ちなみに、「日本郵便」は、万国郵便連合の申し合わせによ
り、ローマ字「NIPPON」を入れ併記している。

これは「琉球郵便」併記の5年後である。

米国民政府は、切手デザインについても、厳しくチェックした。

「日米琉合同植樹祭記念」(発行予定1967.3.17)は、印刷まですませ、米国旗云々でクレームを



琉球政府創立記念(52.4.1)原画
(「安次富長昭作品集」より)



ドル表示暫定数字切手(58.9.16)
「琉球郵便」と表記されている。
原画:安谷屋正義 伊差川新



左:民族舞踊切手(60.11.1)「琉球郵便」
右:同上再発行(61.9.1)「RYKYUS」併記
原画:玉那覇正吉 伊差川新

つけられて、発行中止になった。

植樹のマークの左右に日米の国旗を配した図案だったが、植樹のマークが星条旗の右肩にかぶさっているとクレームをつけられた。

だが、日の丸が右上にあり、星条旗より上位に描かれているというのが真相ではないかもされた。

また、復帰直前の「沖縄返還協定批准記念」(発行 72.4.17) (4P 掲図参照)も同様だった。米国民政府から当初は、星条旗が小さいとクレームをつけられた。

このように、米国民政府の厳しい審査に、琉球郵政庁は幾度となく泣かされた。

今回、どのようにして、「尖閣アホウドリ」切手発行を果たし得たのだろうか？



「日米琉合同植樹祭記念」
印刷も済ませ、1967.3.17 発行予定だったが、米側のクレームで中止された。

権限ある間に 切手発行を !! 海洋シリーズで 審査の目 くらませる？

1970年の沖縄は、本土復帰直前で騒然とし、世替わりの熱気と興奮でみなぎっていた。

1968年国連エカフェの調査で、黄海・東シナ海に海底石油資源の埋蔵が有望視され、尖閣諸島は石油の島として、一躍脚光を浴びた。

台湾・中国は、これまで日本領土としていたが、石油資源欲しさに、態度を豹変し、領有権主張に転じた。地元沖縄では、この隣国の理不尽な主張に怒り、尖閣を守る運動が起こった。

この運動は、地元八重山から沸き起こり、「尖閣石油、地元沖縄の權益を守ろう」の掛け声で、沖縄全土に拡大していった。この動きを当時の新聞から見てみよう。

「尖閣列島、きょう守る会結成。石油資源は沖縄県のもの」(八重山毎日 70.8.8)

「住民1人から1千円徴収。尖閣列島の資源を守る会役員会」(八重山毎日 8.20)

「權益擁護に立上がる、尖閣列島の海底油田開発。民間団体が促進協を組織」(沖縄タイ 8.31)

「尖閣列島問題、『石油開発促進協』発足へ、18日結成総会 全県民的運動めざす」(琉新 9.5)

「尖閣列島石油開発協を結成、46団体が参加、“主体的開発を積極推進」(琉新 9.19)

尖閣を守る運動は、全県民を巻き込む島ぐるみの運動に発展し、「油田開発を急げ」、「尖閣守ろう」の雄叫びは夜空にこだました。琉球政府は、「領土宣言」を行い、琉球立法院は「尖閣防衛」を決議し、内外にアピールした。琉球政府通産局砂川恵勝局長は、琉球政府が権限を有している間に、尖閣の石油鉦業権を許可したい。石油開発から得た利益は、地元沖縄振興に資するとし、「尖閣開発KK」設立を計画し、その実現に奔走していた。だが、惜しくも、頓挫してしまった。

琉球郵政庁は、通産局の部局下にあった。郵政人も、尖閣にかける思いは強かったであろう。

彼らも、切手発行権限を有している間に、“尖閣諸島”を現した切手発行をしたい。

だが、この悲願は叶わぬ夢、不可能に近いことだった。

尖閣をめぐる状況は、72年5月15日の本土復帰に向けて、日増しに緊迫していたからである。

加えて、不本意にも、日米間の沖縄返還協定協議は紛糾していた。

アメリカ政府は、当初、尖閣諸島を返還協定内に含めるのに渋った。

誰もがその変節に抗議し、卑怯千万と憤った。

沖縄開発庁山中定則長官らの尽力で、終局には返還協定内で処理された。

それに抗するかのように、台湾中国は、理不尽な領有権主張、外交攻勢を強めつつあった。日米政府は、両国を刺激すまいと、神経ピリピリだ。

こんな微妙な時期に、“尖閣諸島”を表した切手発行なんて、とんでもない。

これで外交がこじれてしまったら、一大事である。

琉球郵政庁首脳幹部は、こんな厳しい状況の中、如何にすればよいか、鳩首協議した。

ストレートに尖閣の島々を表した切手なら、すぐさまアウトだ。ならば、アホウドリに託すしかない。

アホウドリは、この地球上において、小笠原諸島と尖閣諸島が二大繁殖地である。

これこそ沖縄が世界に対して誇れるものだ。

この世替わりの機に、尖閣諸島のアホウドリを描いた切手を発行しよう。

この切手は、アホウドリが主題だが、同時に、生息地の尖閣諸島も表した原画にすればよい。

琉球切手は、世界的に人気が高く、世界中の切手愛好者は関心を持っている。

この原画の切手を発行すれば、沖縄の島である尖閣諸島も、そこで繁殖しているアホウドリも、世界に向けて発信できる。

それができれば、素晴らしい。これこそが我々琉球郵政人に課せられた最後の仕事だ!!、と。

だが、如何にすれば、うまく、切手発行を成し遂げることができるのだろうか？

思いついた奇策が、「海洋シリーズ」だったのではないかな。

幸い、1975年において、沖縄国際海洋博覧会開催が決定されていた。

この海洋博覧会を記念した「海洋シリーズ」を計画し、このシリーズを隠れ蓑にして発行する。

しかも、復帰直前の最も忙しい時だから、ドサクサでチェックの目を眩ませることができる。

当然、この計画は、郵政庁部内で、秘かに実行されたものと思われる。

もしも、外部に情報が洩れて、マスコミなどに察知され、騒がれてしまったら、万事休すである。

庁内一握りの人間、首脳幹部だけで、秘かに遂行されたプロジェクトだったのではないかな？

安次富画伯のもとへ、渡嘉敷庁長自らが、アホウドリ剥製を持ってきたのはその表れだ。

あの切手審議会の大先生たちも蚊帳の外に置かれ、原画の真相を知らされなかった。

このように考えると、「尖閣アホウドリ」切手発行は、琉球郵政庁首脳らが仕掛けた極秘プロジェクトなのは明白だ。それだけに、どのように立案され、遂行されたのか、多くの謎に包まれている。



上：琉球政府通産局砂川恵勝局長
下：開発KK設立を報じる。(沖縄タイムス 70.10.24)

No.4、琉球郵政庁 どのように 企図したか？

アホウドリ発見 4か月後には すでに立案？ 遂行

成功の鍵は、隠れ蓑の海洋シリーズ発行にあることが推測された。

しかも、これが、3種も発行されているのに驚いた。

72年5月復帰2カ月前に、海洋シリーズ3種(発行3.21~4.14)に加え、沖縄返還協定批准記念(4.17)と琉球郵便 Final Issue(4.20)を発行している。

復帰に向けて繁忙極めた時期に、しかも1カ月間(3.21~4.20)に、5種も切手発行している。

当初関係者の間で、後者2種は必須のものだが、前者の海洋切手は、スケジュール的に無理だから、1種で十分ではないか？との指摘もあったと想像される。

だが、当の琉球郵政庁は、あくまでシリーズにこだわった。最低3種は発行できるからである。

前年71年8月30日、琉球政府立公園シリーズの西表マリュウド滝は、既に印刷されていたが、突然切手販売が中止となった。日米両政府により復帰に伴う米ドルから円へ通貨切り替え証明書の証紙に使用を決定したためである。その件については後述する。

この突然の措置が幸いし、この穴を埋めるとして、海洋シリーズ3種発行案は、すんなりと承認されたかも知れない。

琉球郵政庁の意図やこだわりが、意匠、原画製作者に垣間見える。

- | | |
|---------------------|----------------|
| 第1集「海と島」(発行72.3.21) | 新垣吉紀・金城映芳郵政庁技官 |
| 第2集「珊瑚礁」(同3.30) | 伊差川新画伯 |
| 第3集「海鳥と海と島」(同4.14) | 安次富長昭画伯。 |



第1集「海と島」



第2集「珊瑚礁」



第3集「海鳥と海と島」

主題は、常夏沖縄の紺碧の海と空、島をイメージさせるほのぼのとしたシリーズものである。

この南国沖縄の景色に魅了され、第3集は、領土問題で紛糾している尖閣諸島が描かれているとは、誰も考えなかった。安次富画伯を原画製作者に選任した理由は先に述べた。

第1集の新垣・金城技官についても同様な節が見られる。そのことは後述する。

では、「尖閣アホウドリ」切手プロジェクトが、いつ頃には立案され、遂行されただろうか？

復帰1、2カ月前の1カ月間(3.21~4.20)で、5種の切手発行がなされている。

当時の忙しさを考えれば、当然、5種一括して、切手審議会の審査も、米国民政府によるチェックも一括に行われたと想像される。それを前提に、立案された時期を考えてみる。

発行された5種の切手は、いずれも多色刷りである。当時は、大蔵省印刷局に原画を送り、これを切手に仕上げるのは、多色刷りだと最低3カ月は要するという。

切手原画を依頼し、作成させ、通産局や庁内事務処理、切手審議会や米国民政府などの審査などを勘案すると、当時だと、立案から発行までの期間は、最低6カ月は必要となる。

加えて、復帰直前で、事務引継ぎで忙しい、繁忙極めた時期である。

万が一の場合を考え、発行業務は前倒し、しかも余裕をとつてなされたはずである。

前年71年末か、72年1,2月には完了してなければならない。

逆算すると、「海洋シリーズ」は、遅くとも71年8、9月には、計画はスタートしていたと思われる。

琉大調査団のアホウドリ発見したのはその年4月で、この朗報に沖縄中が喜び沸き立った。

琉球郵政庁は、少なく見ても、その4、5カ月後には、プロジェクトを立案し、スタートさせていたかと思うと、感慨深いものがあった。

琉球郵政庁 首脳幹部で企図？ 指揮官 渡嘉敷庁長？

切手少年だった頃に、那覇中央郵便局に足しげく通った。

琉球郵政庁、とりわけ、「ユウケンカ」には、思い出深いものがあった。

表看板に大書していた「郵政庁 郵券課」の懐かしい文字が思い出された。

1971年当時の首脳幹部を調べてみた。有力候補4人があがった。

郵政庁長 渡嘉敷真球(68.10.25～71.10.31) 大城滋(71.11.01～72.5.14)

郵政事業部長 又吉重雄(69.10.1～72.5.14)

郵券課長 浜元曉男(70.11.10～72.5.14)



復帰前、那覇中央郵便局ビル郵政庁庁舎、那覇市久米町在（那覇市歴史博物館所蔵）
上段右より大城滋庁長 又吉重雄部長 浜元曉男郵券課長

この部内プロジェクトが、遅くとも 71 年 8,9 月には、立案、遂行されていたとしたら、当時の庁長は渡嘉敷真球である。当然、庁長が指揮官でなければならない。

渡嘉敷の自伝があったので、どんな人物なのか、見てみた。

明治 40 年生まれで、沖縄で数少ない通信講習所出身の郵政人である。

また、これまで郵政庁長は外部から天下りだった。

68年内部起用されて、琉球政府初の郵政畑の庁長となった。

自伝には幾つかのエピソードも紹介されている。気骨ある明治人、誇り高い郵政人だった。

1970 年、米国民政府の圧力を払いのけて、組踊りシリーズ小型切手シート(4 枚)を発行した話がある。



渡嘉敷 真球庁長

・・・日本復帰が近づくにつれ、琉球切手の人気は再び上昇し始めた。

郵政庁では、かねて企画していた五種類の「小型シート」を発行することにした。普通は五十枚の切手がシートとなっているが、これは四枚を一シートにした。デザインは琉球芸能を子孫に伝え、世界の人々に知らせようと、執心鐘入や人盗人などにした。ところが、これに郵趣家からいちゃもんがついた。ひんぱんに発行されて下火になるのをおそれたかもしれないし・・・。そのほとんどが、アメリカの郵趣家だった。「郵趣家泣かせだ。発行やめろ」「もし出すなら、琉球切手をまっ殺してやる」と、脅しの手紙が私の所へ何十通も来る。

またアメリカ郵趣家協会の公文書が、主席あてに行く。

小型シートの発行が、危ぶまれる気配になった。

というのも、前例があったのである。日米琉合同記念植樹祭の記念切手が、日の丸の下に米国旗が位置しているというので、米民政府が発行を差し止め、印刷までしていたのに焼却処分された。今度の場合も沖縄が施政権下にあるということで、高圧的に出たのだろう。

ヤミからヤミに流されたのでは、琉球政府の面目は丸つぶれだ。

私は首を洗って待っていた。

そんな時、屋良朝苗主席、砂川恵勝通産局長、私三人が首席民政官に呼ばれたのである。もうだめだと観念していたのだが、話し合いは和気あいあいの中で進められた。

民政官「反対が多いようだが・・・」

主席「郵趣家は必要なければ買わなければいいんですよね」

通産局庁「そうですよね」。

私はこれなら発行は差しつかえない、という印象を受けホッとした。

そして帰りの車の中で、やりましょう」という砂川局長の英断で小型シートは日の目を見たのである。思わず目頭の熱くなるのをおぼえた。とにかく問題あった切手は、ブームになりやすい。異常な人気を呼び、郵券課には前日から泊まり込む人も出たほどだった。

(「私の戦後史 第 7 集 渡嘉敷真球 沖縄タイムス 83年1月刊)



1970 年組踊シリーズ

原画: 伊差川新

☞左 執心鐘入 (発行 70.4.28)



人盗人 (70.5.29)



銘苺子 (70.6.30)



二童敵討 (70.7.30)



孝行の巻 (70.8.25)

このエピソードは、渡嘉敷の面目躍如を物語っており、彼が庁長指揮官として、プロジェクトを立案・推進していたと想像に難くない。自伝には、部内極秘だけに、これを匂わせる内容は一切ない。強いてあげれば、以下の記述が気になった。

さて、長かった郵政生活に終わりがきた。一九七一年十月、郵政庁長を最後に退官。六十四歳だった。この肩書のまま復帰を見てみたいと思ったが、いかんせん官吏の身である。

黙って定年を迎えるだけだった。十七歳の時に宮古郵便局の通信事務員になってから、四十余年がたった。 (同上)

切手発行がなされるのを見届け、晴れて退官したかった。だが、これは叶わぬ夢だった。プロジェクトは周到に立案され、順調に遂行されて、後顧の憂いはなかった。渡嘉敷は、後任の大城滋新庁長らにあとを託して、庁舎を去っていった。進捗状況は、その都度報告され、必要とあらば、後方で指揮を執っていたかも知れない。

その渡嘉敷に、会って、話を聞いてみたかった。

もし、存命ならば、とうに 98 歳 (2005 年時) の高齢だ。元気かどうか分からない。

後任の大城滋新庁長や又吉重雄部長も、また同様であろう。

この 4 人のなかで一番若いのは、郵券課長浜元暁男だ。

そう考えると、ぜひ、浜元を探し出して、会ってみたいと思った。

ただ、「尖閣アホウドリ」切手発行は、部内の極秘プロジェクトで為されている。

たとえ、会えたとしても、とても話は聞けない。でも、聞けなくてもいい。

切手発行を企てたのは、どんな人たちだったか。それだけでも知りたい。

浜元を探そうとの思いは、高まっていった。

No.5、郵券課長 独断で 第1集も 「尖閣」目論む

浜元課長 予科練上がりの古武士 尖閣問題に熱意

郵便局関係者に、浜元課長のことをいろいろと当たってみた。

だが、誰も消息は知らなかった。幸い、古い電話帳をめくったら名前があった。電話を入れたがつかない。那覇市石嶺とある住所界隈を訪ね歩いた。やっとのことで探し当てたら、他の人が住んでいたのがっかり。所在を聞いても、そんな人は知らないという。

もう亡くなってしまっていると、すっかり諦めていた。

そんなある日、たまたま本を見ていたら、衝撃の一文に出くわした。僅か2行の記述だった。

琉球政府は、尖閣諸島の地図切手の発行を中止している。

その原図は現在沖縄県立博物館に保管されている。

(「沖縄独立」の系譜 比嘉康文著 2004年6月刊)

沖縄県立博物館に、尖閣地図切手の原図がほんとに保管されているかと問い合わせた。

また、著者の比嘉康文(元沖縄タイムス記者)に、詳しく話を聞かせて欲しいと連絡した。

博物館の方は、こんな原図はないとの返事だった。数日後に、比嘉に会うことができた。

「尖閣地図切手」のことを聞くと、浜元暁男という人がそんな話をしていたとのことだった。

彼の口から浜元の名が出たのに驚いた。全く諦めていただけに飛び上がって喜んだ。

比嘉と彼との出会いも偶然である。沖縄県公文書館で講演会があり、その講演会場で、たまたま浜元と隣り合わせの席になり、尖閣問題で意気投合したと云う。

その時に、あの尖閣地図切手の話をしていた。

浜元は元郵政庁にいて、切手発行に関わった人らしいとのことだった。

自分はずっとこの人を探していた、ぜひ、会わせてほしいとお願いした。

比嘉もその時会っただけで、家も知らない、電話で連絡し、一緒に会いに行こうと約束してくれた。

数日後に、比嘉と連れだって、沖縄市にある彼のマンションを訪れた。

浜元は、体格がいい、見るからに豪傑肌で、気さくな感じの男だった。独り住まいで、小ざれいにしていた。訪問した2005年当時は、今のようにインターネットがあまり普及してなかった。

80歳を超した彼がパソコンを大型テレビにつなぎ、インターネットを楽しんでいるのに驚いた。

「これでニュースと世界の情勢を観ている、世の中も便利になったもんだ」と、屈託ない笑顔で言っていた。知性と古武士然の雰囲気漂わせていたのは、元予科練海軍航空隊パイロットだったからかと思った。戦闘機に乗ったパイロット姿の写真を見せてもらった。

若き日の空の勇士は、眉目秀麗で凛々しくほれほれする機上姿だった。

尖閣問題には大変な熱意を持っていたことが分かった。

尖閣油田開発に情熱をかけていた大見謝恒寿(沖縄側の鉱業権出願者)のことを新聞で知り、

大変感激したという。ぜひ、会いたいと、ホテル大文閣で面会の約束をしたが、急用ができて会えなかった。そのあと機会を見つけて、会う積りでいたが、のち大見謝が急逝したのを知った。

元気なうちに早く会っておけばよかったと残念がっていた。

浜元が郵券課長を拝命したのは、70年11月から72年5月の復帰直前であり、復帰準備事務引継ぎで最も忙しい時期だった。

人並外れた豪胆と敏腕さを買われたようだ。一説には組合対策として、全通労組は官公労の中で最も過激であり、彼ならば、その労組と渡り合える力量があるから抜擢されたとも言われていた。

仕事に有能な彼は、常に真剣勝負で挑み、厳しかった。

山積していた難題解決に、日夜奮闘していた。

在任中の大きな思い出は、「琉球政府立公園、西表マリウド滝切手」を復帰に伴う米ドル対円の通貨交換差額保証の証紙として急遽転用されたことだと言った。

彼は、その顛末をまとめ、「証紙に化けた琉球切手」沖縄県立博物館友の会「博友」第十号 1996.3」に紹介していた。この時にもらった抜き刷りが、今も手元にある。

浜元は、復帰に伴う郵政省関係機関との事務処理交渉に忙殺された。琉球郵便切手発行に伴う日米政府のクレーム処理にも当たった。前記の証紙に使われた「西表マリウド滝」についても、公園指定の件で農林省や国土庁、文部省まで巻き込み物議を醸したものだだった。

沖縄返還協定批准記念切手についても、米国民政府から米国旗が小さいとクレームをつけられた。それを解決したのが浜元だった。

日米両政府の横やりを受けないようにするのが第一だった。

彼の話聞きながら、どのように用件を切り出したらいいのか迷った。

比嘉が連れてきた男が例の尖閣切手の話に興味をもっていると聞いているはずだし、目の前の素性不明なこの男は、どんなことを聞きたいのかと、少し警戒しているようにも見えた。

もしも、下手に切り出して、機嫌を損ねてしまったら、元も、子もなくなってしまう。これに似た苦い経験、失敗を思い出した。

閑話休題 僕は どこで飯を食ってきた人間か 分かるか？

かつての苦い経験—失敗談を披歴したい。



浜元 暁男



「西表マリウド滝」の証紙切手が貼られた米ドル対円の



政府立公園シリーズ第4集
西表公園マリウド滝
(発行予定 71.8.30)

1963 年高良鉄夫博士は、琉球文化財保護委員会の委嘱を受け、尖閣諸島にアホウドリが棲息しているか調査した。68 年には、尖閣諸島鉱物資源予備調査をした。

この調査団一員に、伊志嶺安信(琉球気象台海洋係長)がいた。

彼は 1960 年代、2度にわたり尖閣諸島に渡島し、周辺海域の海洋調査を行った。

これは先駆的とも言える尖閣諸島の海洋調査である。調査成果を参考までに記す。

「尖閣列島海洋調査報告」 伊志嶺安進 琉気時報 第 7 号 琉球気象台 1963.5

「海洋学的に見た尖閣列島」 伊志嶺安進 正木譲 琉球政府に提出した復命書 1969.9

伊志嶺は、長崎海洋気象台、石垣島測候所、琉球気象台海洋係長を経て、与那国島、南大東、宮古島の各気象台長を歴任し、沖縄海洋気象界の重鎮だった。

南西諸島は東シナ海、太平洋と広大な海域を抱えている。

72 年復帰に際して、関係者の間では、琉球気象台は、長崎に次いで、琉球海洋気象台への昇格？が取りざたされ、期待されていた。惜しくも海洋気象台構想は実現しなかった。筆者も、この件に関心があった。

高良先生の紹介で、伊志嶺に、尖閣調査の話聞く機会を得た。

尖閣の海洋調査の苦労話をにこにことして話してくれた。この時に、序でとばかりに、琉球海洋気象台構想が頓挫した件を聞いてみた。



左から伊志嶺安進、高良鉄夫。尖閣調査の話をつたえ、両先生にお聞きした時、合間を見てパチリ、(編纂会 2005)

「復帰という折角のチャンスだったのに、残念でした。なぜ、この案がつぶれてしまったか、そのことを知りたいです。また気象台関係者でどんな議論があったのですか？」

と、問いかけたら、とたん、伊志嶺の顔が曇った。

「僕は、どこで飯を食ってきた人間か分かるか？」

確かに、海洋気象台がつぶれたのは残念だ。仕方がない。

だからと言って、僕は、このことを、なぜ君に話さんといかんか。

そこまで、君に、与(く)みせんといかんのか」

この言葉に、驚き慌ててしまった。

「与みしてほしいとなんて、とんでもありません。ただ関心があったから・・・」と平謝りし、機嫌をとりなしてもらったが、私の無作法をたしなめる言葉に、大変恥ずかしい思いをした。

話し手は立場上、話せぬことや話していけないことがあるから、お構いなしに、話をせがんではいけないとの戒めだった。今でも忘れられない言葉だ。

あの一言に、伊志嶺ら、戦前・戦中の先輩方の偉大な姿を見た。

うまく表現できないが、人間としての誇り、男の美学を見たような感じがした。

仕事一筋生きてきた男たちの言葉ではないか。

不本意だったからと云って、かくかくしかじかだったと、過去の内情を曝け出すことはまっぴら御免だ、誰かを非難し、自らを正当化することにもなり兼ねない。

伊志嶺の場合、公務に携わってきており、仕事に対し守秘義務もある。

これ破るのは、人間の作法として許されるべきでない。

日本男児たる美意識にも反する下劣な行為だ。

のち、伊志嶺に原稿を書いて頂いた。「尖閣・東シナ海調査追想5題」(「尖閣研究 高良学術調査団資料集」下巻掲載)である。勿論、海洋気象台構想は触れてない。

浜元の場合も、戦前、戦中の人間である。しかも、予科練出で、筋金入りのヤマト男児だ。

それに、伊志嶺と同様、公務に携わり、過去の仕事に対して守秘義務を負っている。

「尖閣アホウドリ」切手プロジェクトは、琉球郵政庁の部内極秘だ。

しかも、彼は、切手発行を仕切った当時の郵券課長である。

渡嘉敷庁長らが、原画製作者の家に、剥製を持ち込んで、アホウドリを描かせたとは、とても言えたもんじゃない。そんなことを考えながら、切り出すタイミングをうかがっていた。

豪胆にも 第一集「尖閣の海と島」 独断で目論み 惜しくも頓挫

幸い、日米両政府の横やりで切手発行に、あれやこれやの苦労話で盛り上がっていた。

終始、にこにことして、機嫌がいい、和やかな雰囲気だった。

頃合いを見て、「尖閣アホウドリ」切手発行の件を、切り出した。

海洋シリーズ第3集を取り出し、アホウドリを差して、短刀直入に聞いてみた。

「描かれているこの鳥の恰好は、アホウドリに似ています。また、この島の形は、尖閣の南小島にそっくりです。この切手は、尖閣のアホウドリと島を描いたものと思いますが・・・」

緊張のあまり、初対面でのいきなり不躰な質問である。

これでは、機嫌を損ねてしまったのではないかと、心配した。

だが、浜元は、別段不機嫌な様子を見せない。

それに、肝心の質問にも答えてくれない。

切手からゆっくりと目を離すと、突然、意外な話に転じた。

その内容に驚かされた。

浜元の話をもとめると、以下の通りである。

尖閣列島は、紛れなく日本の固有の領土、沖縄の島である。

なのに、わが国領土である尖閣をテーマとした切手発行を、なぜ日本政府は嫌がるのか。

この復帰という世替わりの機会に、沖縄側に、勝手に切手発行させればいい。

長い目で見れば、それが得策である。もし、あとで問題になるとしたら、日本政府は、我関せずで、琉球政府(琉球郵政庁)が、自らの権限で、勝手に発行したんだと、責任を押し付けなければいいのだ。彼が「海洋シリーズ第3集」のことを言っている、と聞いていたら、そうでなかった。

浜元が口にしたのは、「海洋シリーズ第1集「島と海」」のことだった。

何と、もう1枚、「尖閣列島」切手発行を目論んでいた。

第1集「尖閣の海と島々を描いた」切手発行を企てていた。

どうせ、原画を描くならば、尖閣の海と島にしたい。

波濤が打ち寄せ、海鳥が飛翔する南北両小島の夕景色もよい。

岩骨怪巖が鋸立する魚釣島の雄姿も望ましい。

勿論、岩骨尖峰の島影を描いた原画に、「尖閣列島」と明記したら、日米両政府の検閲官はマユをひそめて驚く。

こんな藪蛇は、愚の骨頂だ。

知らん顔して、単に常夏沖縄の「島と海」だと言えばいい。

切手発行所轄しているのは郵券課だった。

浜元暁男課長は、あくまで強気だった。

最後まで、知らぬ存ぜぬで、押し通せばよい

彼は、その様を想像して、ひとりほくそ笑んでいた。

無論、発覚した場合は、独断専行の責任をとる覚悟だった。

浜元は、郵券課の原画技官二人を先島へ、2週間の出張命令を下した。

とても忙しい時期の出張だった。

だが、先島へ出張した係官は、折しも天候悪く、尖閣に向けて船出できなかった。

僅か2週間の期間しかなく、天候の回復はいつまでも待てない。

あわてて、八重山周辺を回ったが、気に入るような光景に出くわさない。

那覇近くに赴き、やっとのことで「慶良間の海と島」の夕景色を描いた。

浜元の見論は、実現できなかった。



浜元の見論は不発に終わった。
第1集は慶良間の「海と島」となった。

この話を聞き、彼が比嘉に話した「琉球政府は、尖閣諸島の地図切手の発行を中止している。

その原画は現在沖縄県立博物館に保管されている」意味がようやく理解できた。

「琉球政府(日米両政府を含む意)は、尖閣諸島の地図切手の発行を中止しているので、第1集「海と島」を、尖閣の海と島を描いた原画を密かに計画し、進めていたが不発に終わってしまった。

その原図は、県立博物館に保管されている」との意味だったのだ。

最終切手に “Final Issue” 大書 世界に類例なし

浜元の仕事ぶりは、予科錬出だけに豪胆だった。

琉球切手原画は、復帰に際して大蔵省印刷局に掛け合い里帰りさせた。

彼のお陰で貴重な原画が沖縄県立博物館に収蔵され、観覧できるようになった。

最終の喜(ユシ)瓶切手には、“**Final Issue**”と付記されている。

これは世界に類例がないという。浜元は切手審議会を通さず指示し、強引に印刷させた。

また、琉球切手は人気売れるからと、海洋シリーズを 250 万発行させたのも彼の建言だった。

その直前の琉球政府立公園シリーズは 180 万発行であった。

発売日には、大勢の愛好家が押しかけ長い列をつくり買い求めた。

ある時、その列に。暴力団風の男たちが無理やり、割り込んだ。

これを見て激怒して、とんでいき、彼らを叱り飛ばした。

浜元の凄味に威圧され、怖気づいて、急ぎ列から、逃げ去ったという。

第 1 集の件は 知られざる椿事である。

浜元が目論見が実現していたら、驚くべき大快事である。

郵券課原画製作技官二人が誰かを調べてみた。

新垣吉紀、金城暎芳とあった。

兩人とも、年賀切手や花切手、切手趣味週間シリーズの原画を製作したベテランだった。

同シリーズで琉球郵便最終切手の喜(ユシ)ビンの原画製作は、新垣吉紀となっていた。

自分の部下だったから、彼は、“**Final Issue**”と大書できた。

浜元は、琉球郵政庁部内で、海洋シリーズ案が取りざたされた早い段階から、第 1 集に対し、秘かに目論んでいた。

原画担当が部下ならば、好都合と考えて、かの二人を推挙したかも知れない。

この新垣、金城二人に会って、先島出張の話を知りたいと思った。

だが、上司の密命を帯びた仕事であり、尖閣へ船出できなかった話はしてくれないだろう。

他のこと、八重山に行った話だけでも聞いてみたかった。

話は、前後するが、それから数か月後のことである。

そのうちの一人金城技官に連絡を取ることができた。

県公文書館近くの可否館で会った。芸術家タイプでおとなしい感じの人だった。



琉球郵便、最終の喜瓶切手。
浜元は、“**Final Issue**”と
大書した。

1 時間半ほど話したが、やはり、目的の尖閣行きの話は全くない。こっちも聞くわけにいかない。八重山は、あちこち回ったが、気に入る景色がなかった。そのあと、慶良間に行って描いたのが、海洋シリーズ第 1 集「海と島」の風景だという。金城技官の話は、浜元が言った通りだった。

浜元や金城から、第1集の真相は聞けないにしても、これを傍証する資料は欲しかった。やはり、その時の先島出張に関する稟議書、予算書、復命書を探すしかない。尖閣出張と明記されてなくても、何らかの手掛かりは得られるかも知れない。だが、琉球郵政庁の公文書は、復帰時のドサクサで散逸し、所在も不明だった。沖縄県公文書館を探しても、当時の文書、関連する資料是一片も残ってなかった。

琉球政府二大暴れん坊？ 尖閣談議に 花咲かす

先の浜元との話に戻る。

初訪問から数週間後に、彼のマンションを再び訪れた。比嘉の同伴なしである。前回、第 3 集「尖閣アホアドリ」切手発行の件を聞いたら、ノーコメントだった。極秘の部内プロジェクトだから話すわけにいかない。また、第 1 集の頓挫した「尖閣の海と島」の原画の件も口にしない。これらは、タブーだと考え、質問はすっかり諦めることにした。

浜元は、尖閣問題に対する関心は並々ならぬものがあった。とりわけ尖閣油田問題に強かった。

当時(2006 年頃)、中国は東シナ海ガス田開発をどんどん進めていた。彼は、このまま放っていたら、尖閣の海底油田、天然ガスまで、中国に盗られてしまう。いったい、日本政府は何をもたもたしているかと怒りをぶちまけていた。

話題は、1968 年国連エカフエの発表で、尖閣海域に石油があると知り、中国は領有権主張をしたこと、総理府による尖閣諸島資源予備調査(団長高岡大輔)が実施されたことに及んだ。

高良先生が調査団を案内し、琉球政府からは、大城盛俊(工業課鉦山係)と新城鐵太郎(渉外課長)が調査に参加した話をしたら、浜元は目を輝かせた。かの新城にぜひ会いたいと言った。

先方に連絡を取り、約束の日時と場所を決めた。那覇久米の青年会議所会館レストランで会うことになった。10 数年ぶりの感激の対面だった。

当の新城鐵太郎も、浜元に劣らず豪胆強者だった。沖縄三中(旧制)時代は鉄拳制裁の番長で恐れられ、戦時中、小隊長として、部下を率いて、広大な中国大陆を、艱難極める横断行を果たした逸話の持ち主である。

この百戦錬磨の小隊長と命知らずの予科練上がり二人は、揃って豪胆と敏腕さを買われたのだろうか。当時の労働組合(官公労)に乗り込んでいき、組合幹部と激しく渡り合ったという当時の思い出話に興じていた。

話題は、尖閣問題に転じると、浜元は、新城の尖閣調査の話に熱心に聞き入った。

新城は、高岡団長は、この予備調査結果、石油が埋蔵している可能性が高いと分かり、喜んで
いた。すぐさま、日本政府に働きかけ、東海大学による尖閣海域の海底調査を3回実施させた。

また、尖閣に行き、台湾漁船の不法操業、不法上陸のひどさに驚いた。松岡主席に、無法地
帯化している様子を報告したら、主席は、米国民政府と話し合った結果、三か国語の不法防止の警
告板が建てられた。それでも不法操業、上陸はあとを絶たなかった。等々の話をした。

新城は、米海軍艦船による取り締まりをお願いしたことを追想記に記している。

あるとき、冗談のつもりで米国民政府のフライマス渉外室長に、「台湾漁船が勝手気まま
に領海侵犯しているので、米海軍の艦船で尖閣の監視・巡航をさせてほしい」と言ったら、
「米海軍の艦船を動かすには、軍事作戦下でないと動かせない。遺憾ながら貴官が言うよう
に監視のためには動かせない」と真顔で説明されたことを思い出す。

（「米海軍艦船は作戦下でしか動かせない」 新城徹太郎 前出「尖閣研究」下巻）

二人は、復帰後は、中国は、我がもの顔で東シナ海ガス田開発を進めている。日本政府は弱腰
姿勢だから、このままでは、いったい尖閣の油田はどうなるだろうかと、心配を口にしていた。

やはり、復帰前に、砂川恵勝通産局長
は、「尖閣油田開発KK」設立しようと頑張っ
ていた。あれは先見の明ある考えだった。

あの時に尖閣KK ができていたら、こんな
にはならなかったと、二人の話は一致した。

憂国の志士の尖閣談議は、尽きるところ
がなかった。

気が付いたら、陽も傾きかけていた。

今日は久しぶりに、思い切り話せた。楽し
かったと、笑顔で立ち上がった。

新城は、浜元の手を握り、お互い身体に
気をつけて長生きしよう。これからは、時々
会おうと約束して、分かれた。



2人が10数年ぶりに対面した時に、記念に撮った写真。
前列左より浜元暁男、新城鐵太郎、後方筆者（編纂会2006）

「尖閣アホウドリ」切手 最後の証人 黙したまま消え去る

ひと月後に、彼のマンションを訪れた。生憎の不在だった。

郵便受にメモを入れておいたが返事がなかった。電話をいれたら、不通のままだった。

そのあと、数回訪れたがやはり不在だった。彼の元気づぶりに感心していただけに、別段気にも
留めなかった。引っ越したのかとも思ったが、そんな様子もなかった。

しばらくして、「尖閣アホウドリ」切手について、整理して、一文にしてみた。

ぜひとも、感想を聞いてみたいと思い、これを携えて、マンションを訪れた。

数カ月ぶりだった。何か人気のない様子だったので、今度は少し気掛かりだった。
用件メモして郵便受けに入れて帰ったが、返事は来なかった。
新城鐵太郎に聞いても、あれ以来連絡もないという。病気ではないかと心配していた。

その年末頃から翌 2007 年に入ると、「高良学術調査団資料集」作成は大詰めを迎え、連日忙殺された。仕上がったのが 11 月だった。先の一文を整理し、同書下巻の“閑話休題”に掲載した。タイトルを「琉球郵政庁、復帰直前『アホウドリ』切手発行 海洋シリーズ第 3 集『海鳥と海と島』をテーマに」とした。出版したばかりの「資料集」を携えて、ほぼ 1 ヶ年ぶりに、マンションを訪れた。一見して転居していることが分かった。どこに転居したのだろうか、皆目分らない。連絡も取れず、依然として消息不明のままだった。その間、「尖閣アホウドリ」切手について、浜元の話も加えて、取りまとめることにした。これを 2008 年 2 月旧 HP (pinacles) で、タイトル「幻の切手発行顛末」にして紹介した。浜元の話は、久しく分からず、数年の歳月は過ぎて去っていった。

風の便りで、彼の訃報を知ったのは、この 4,5 年前だった。病で倒れ、長い間病床に伏していたとの話に驚いた。南風原徳洲会病院に入院中だったという、そこは那覇から車で 30 分ほどの距離にあり、見舞い行けなかったのが悔やまれた。浜元には 3 回しか会えなかった。那覇に来て、新城と会った時が最後になるとは、予想もしなかった。元気そうだっただけに、もっといろいろな話が聞けると期待し、楽しみにしていた。

「尖閣アホウドリ」切手プロジェクトは、琉球郵政庁の終幕を飾るにふさわしい偉業だった。郵政人らは、一致団結して、この難業に挑み、見事、切手発行を成し遂げた。海洋シリーズ第 3 集には、わが国領土尖閣諸島とアホウドリが凜然と輝き描かれて、世界へ向けに発信されている。これは沖縄県民のみならず、日本全体の大きな誇りと言えよう。郵政庁首脳幹部らの極秘プロジェクトといえ、誰が立案し、如何にして遂行されたのだろうか？ 渡嘉敷庁長に次いで、中心人物と目されたのは浜元郵券課長である。彼は、また第 1 集「尖閣の海と島」切手発行を目論んだが、惜しくも頓挫した。この二つの真相は、今だ不明で、謎に包まれたままである。

復帰から 34 年(2005 年時)の歳月が経過している。部内極秘だったとは云え、もう時効ではないか。最後の証人浜元に対して、せめて、第 3 集だけでも語ってほしいと、秘かに期待していた。だが、彼は、固く口を閉ざし、真相について一切語らなかった。渡嘉敷庁長ら、首脳幹部の名前も、一切口にできなかった。第 1 集の目論見だけは、一言つぶやいた。語ったのではない。日本政府に対し、「この復帰世替わりの機会に、沖縄側に勝手に切手発行させれば得策だったのに」と、皮肉を込めてつぶやいた。それも一回きりである。技官 2 名を派遣した話でも、新垣・金城の名前を、口にすることなかった。

第3集は成功し、第1集は図らずも、頓挫した。

浜元に言わせれば、琉球郵政人の名誉と誇りを賭けて、これに力の限りを尽くしたのだ。

成功したからとて、気負いはない、失敗したからとて、悔いもない。

だから、語るべきは何もない。我々の出番は終わった。黙して去るだけだ。

次は、諸君の番だ。君たちの出番なのだ。

彼は、そう言ったに違いない。だとしたら、男として、実に見事、爽快ではないか。

彼らの見事さ、爽快さは、いったい何ゆえだろうか？ うまく表現する言葉が見つからない。

もしかすると、現代の私たちが失ってしまった日本人の誇りや気概、美意識のようなものかも知れない。浜元はじめ、渡嘉敷庁長らは、戦前・戦中生まれで、日本男児の美学を体現した丈夫たちだ。誇り高き彼らは、真相を語るを潔しとせず、黙然と去って逝った。

エピローグ 滑り込みセーフ 切手発行叶う 郵政人の悲願達成

彼らが去った今、この真相は、謎に包まれたままだ。

だが、3集「尖閣アホウドリ」切手発行を成し遂げたのは、厳然たる事実である。

もう1度、この経緯をふり返ってみよう。

当時、日本復帰は秒読みの段階に入り、沖縄返還協定協議においては、尖閣をめぐる日米両政府の確執があった。そんなとき、尖閣云々の切手発行は、一番にタブー視されていた。

日米両政府においては、もとより切手審議会でも、「こりやダメ」と杭を打たれる恐れがあるとして、巧妙なカムフラージュ作戦を考えた。

隠れ蓑に海洋シリーズを提案し、第3集「海鳥と海と島」をテーマに、尖閣諸島のアホウドリの原画製作を企んだ。琉球郵政庁首脳が、原画製作者のもとへ、剥製を持ち込みだ。

注文の海鳥を描かせた「尖閣アホウドリ」原画は、見事なでき映えだった。

あとは、海洋シリーズ3種と日米返還協定、最後の喜瓶切手の計5種を一括して、切手審議会に送付した。審議会は大忙しだ。件の原画は、常夏沖縄をイメージする「海鳥と海と島」を描いたものとして、何の疑いもせず、すんなりとパスした。

次の難関の米国民政府から、何の物言いもない。

大蔵省印刷局へ送付された。郵政省のチェックも、難なくパスした。

日本政府からの何のクレームもなく、250万枚が印刷指示された。

1972年4月14日、琉球政府の公告通り、ついに発行された。

琉球政府公報や公告、告示、切手シートに大きく明記した。

そのお陰で、誰も、常夏沖縄を象徴する「海鳥と海と島」が描かれていると疑わなかった。

このテーマを前面打ち出したカムフラージュ作戦は、大いに効を奏した。

琉球郵政庁は、公告に「沖縄で海鳥群の見られるところとして、八重山石垣市に属する無人島などが上げられるが・・・」と表記した。

だが、当日の初日カバーの一部には、「**THE SENKAKU ISLANDS**」と明記したものもある。

紛れなく、「尖閣諸島とアホウドリが描かれている」事実は、隠せるものでなかった。

海洋シリーズ第3集(海鳥と海と島)

琉球政府では、1972年4月14日に“海鳥と海と島”を意匠とする海洋シリーズ第3集郵便切手を発行する。沖縄で棲息する海鳥としてアホウドリ・カツオドリ・アジサシ・オオミズナギドリなどがよく知られている。それらの海鳥も古くは沖縄の各地の海岸に棲息していたことが、文献や言い伝えによって明らかであるが、それも人文の発達により、次第に主要島から遠ざかり、現在はへんぴな無人島でしか、その群棲を見ることができない。

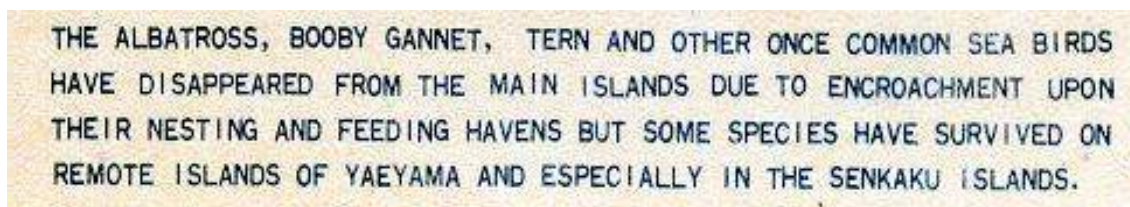
沖縄で海鳥群の見られるところとして、八重山石垣市に属する無人島などが上げられるが、そこにおいても卵や羽毛、鳥糞の乱獲によりほとんどその姿を見せなくなった海鳥もあり、無人島と言えども安住の地ではないと言える。

(図案) 発行日：1972年4月14日 額面：5セント
 意匠：海鳥と海と島 刷色：多色版式：グラビア
 印面寸法：たて33×よこ22.5(ミリ)
 シート構成：たて5×よこ4の20枚
 図案者：安次富 長昭 発行枚数:250万枚





「尖閣アホウドリ」切手の初日カバー(1972.4.14)



初日カバーの説明を拡大した。行末尾に「THE SENKAKU ISLANDS」と明記している。

その3日後に「沖縄返還協定批准記念」切手は、発行される。

さらに3日後には、浜元が、「**Final Issue**」と大書した最後の琉球郵便一祝いシンボルの「喜ビン(祝い酒ビン)」切手が発行される。

復帰当日は日本郵便「復帰記念守礼門」切手が発行され、以後は日本郵便に取って代わっていくことになる。

琉球郵政庁は、世替わりを期して、解体消滅し、琉球郵便は終息となる。

もう、琉球郵便は、永久に発行されることはない。

琉球政府郵政人たちにとって、「尖閣諸島」切手発行は、とても叶わぬ夢だった。

ならば、せめて、沖縄が世界に誇り得る「尖閣アホウドリ」切手を発行したい、

琉球郵政庁が、切手発行の権能を有している間の悲願だった。

千載一遇のこの好機を逸せずと、彼らを駆り立てたものと思える。

苦心算段の末、第3集「海鳥と海と島」は、滑り込みセーフで発行にこぎ着けた。

「尖閣アホウドリ」切手は、復帰1月直前に、かけ込みで発行できた。

この快挙を成し遂げて、誰もが安堵しただろう。

郵政人として、これで心おきなく世替わりを迎えることができる。

5月15日の世替りは、足早に、もうそこまで来ていた。



復帰当日(1972年昭和47年5月15日)の初日カバー
 説明には、「琉球政府閉庁・沖縄民政府解散日 琉球ラストデー 沖縄復帰記念」とある。
 表記の「沖縄民政府」は誤りで、正しくは「琉球(列島)米国民政府」である。

(了)

追記：

この稿は、2020年1月本HPのリニューアルを機に、2008年2月旧HP (pinacles) で紹介した「幻の切手発行顛末」を書き改めたものである。

2005,6年の頃に取材したもので、あれから14,5年の歳月が過ぎ去っている。

今だに「尖閣アホウドリ」切手発行の真相は明らかでない。

だが、いつの日か、ひよんな所から関連した資料が出てくるのでは、と期待している。

(琉球郵政庁の行政文書は、復帰後に郵政省に移管？され、沖縄県公文書館にはない)

それが5年先か、10年先か分からない。もしかすると次世代時かも知れない。

この日のためにもと、薄れかけた記憶を辿りながら、できるだけ当時の状況を、あえて実名(敬称略)も記し、残しておくべきではないかと考え書き綴った。

また、この際、琉球切手の素晴らしさを紹介しようと、余計なものまで加えてしまったようだ。このため、聊か不要領、かつ冗長な内容になった。

本稿を2つに分けて紹介したのは、この理由による。

また、新聞や郵趣誌で、この「尖閣アホウドリ」切手秘話を、紹介して頂いた。

お陰で、多くの人たちに、この事実を知ってもらうことができ、感謝に堪えない。

これらを、本ページの「3、新聞雑誌で紹介されたもの」に転載いたしました。

閲覧下さるようお願い申し上げます。

以上